

## ▼突然のがん宣告と転機

16年前、私は突然「子宮頸がん」を宣告され、医師に言われるまま子宮と卵巣の摘出手術を受けた。その後、直腸がんが見つかり、生きる気力を失いかけた。

そのようななか、がん患者が集うイベントに参加し、生きることに向きで笑顔の患者たちに圧倒された。「自分は今、ここに生かされている」ことを強く感じた私は、「一分一秒を大切にできることを！」という想いを胸に、仲間を集め、がん患者を支援する活動を開始した。

## ▼「がん教育」に取り組む

私たちは、2008年からがん患者の支援を始め、現在はNPO法人として、幅広い世代を対象にがん予防などの啓発と、地域一体の保健と医療・福祉の増進を目的に活動を続けている。おもな事業は、がん患者と家族の心身のケアやがん検診推進などのがん教育・啓発活動、がんに関するイベントの企画・運営などである。

その中でもとくに力を入れているのが、2013年から始めた小・中学校、高等学校で行うがん

# 社会と教育の 架け橋 生命と教育

## 子どもたちに伝えたい 「いのちのメッセージ」

NPO法人 キャンサーサポート  
代表理事

みやべ はるえ  
宮部 治恵

2008年より任意団体として発足し、2014年にNPO法人設立。学校での「いのちのホームルーム」、企業等で大人へのがん教育も行う。病院でのがんサロンで患者とその家族の心身のケアや遺族へのグリーフケア、イベントの企画・運営など幅広く活動をしている。

教育「いのちのホームルーム」である。この活動を始めたきっかけは、ある婦人科の医師から「宮部さんは子宮や卵巣取らんでよかつたかもね」と言われたことである。知識がないまま手術したことを深く後悔した。未来ある子どもたちに私と同じ思いをさせないために、学校の教育の中で「がんの正しい知識」を少しでも伝えていきたいと考えたのである。

学校の先生への紹介や広報活動により、少しずつ教育現場に受け入れられ始めたころ、国による「がん対策推進基本計画」のもと、学校教育でのがん教育の必要性をふまえた子どもへの「がんの教育・普及啓発」活動が本格的に動き出した。2014年には私の住む福岡市と福岡県がそのモデル地域に含まれ、教育委員会からも声を掛けていただけようになった。

## ▼子どもたちへの いのちのメッセージ

「いのちのホームルーム」は教室ごとに、1時間の授業時間を「正しいがんの知識」、「がん患者の体験談」、「みんなの感想」の3つに分けて行う。

まず、子どもたちからがんにつ

いての疑問を聞いてみると、「がんはうつりますか?」「タバコはなぜダメなのですか?」とさまざまな質問が飛び出してくる。看護師など医療従事者は「正しい知識」として、がんができるしくみや種類、がんはうつらないこと、がん予防のためには好き嫌いなく何でも食べて運動すること、タバコの怖さなどを教え、丁寧にわかりやすく模型やイラストなども用いて質問に答えていく。精度の高いがん検診の大切さや、日本では2人に1人ががんにかかり、そのうち3人に2人は治ることを伝え、早期発見・早期治療の重要性も説く。

次に、がん患者や経験者が、がんのイメージと死について子どもたちに問いを投げかけたのち、自身の体験談を語り始める。ここでは私の体験を話したいと思う。

34歳の時、仕事中に突然出血し入院した。「子宮頸がん」の宣告、そして手術。がんにかかったショックも大きかったが、子どもを生めなくなったことがなかなか受け入れられなかった。抗がん剤の副作用で、髪の毛も眉毛もすべて抜けた。その3年後、「直腸がん」と診断され、「腫瘍が大きすぎて手術ができない。このままだ



「いのちのホームルーム」の教壇に立つ筆者。体験談導入で「私はがん患者です」と言うと、子どもたちは声をあげて驚く。「元気ながん患者」がいたら知ってもらいたいことも、がん教育のひとつ。

と余命1年です」と淡々と医師から伝えられた。毎日泣くことしかできず、友達からの電話にも一切でなかった。薬の副作用もひどく、うつ状態が続いた。そして、「死んでしまうかもしれない」という恐怖から抜け出せなかった。

そんな時、元気に退院していった闘病仲間の女性が事故で亡くなった。残された2人の小さな子どもたちを思うと、彼女一人の命ではなかったことに悲しみが増す。と同時に、健康でも病気で人も必ず死ぬということを思い知らされた。生きている時間は限りあるかけがえのないものだ。だったら、今を大切に笑って生きていこう！と治療に専念する決意をした。家族や友達、会社の同僚に精神的にも支え励まされ、助けられた。こうして手術を受けることができ、今ここにいます。

「キャンサーギフト（がんからの贈り物）」という言葉がある。私はがんになつてよかったとは決して思っていないが、悪いことばかりではない。自分だ

けの命ではない「いのちの大切さ」と、生きている時間には限りがあるという「時間の大切さ」、支えてくれる「人のあたたかさ」の3つを知ることができたからである（それぞれ患者によって内容は異なるが、この3つを体験談の共通のテーマとしている）。

そして、子どもたちには「いのちのホームルーム」の話を大切な人に伝えて欲しいとしめくくる。自分や自分の大切な人ががんになった時、必ず助けになると思うからだ。つらいことにおつかった時、少しでも思い出して生きることに前向きになってくれたらうれしい。この瞬間を大切に、子どもたちには自分らしく、友達や家族にも感謝して生きて欲しいという願いも込めている。

最後は、子どもたちから感想を話してもらう。みんな競って手を挙げて、「おばあちゃんががんで亡くなりました。もっと早くにこの授業を聞いていたらたくさん何かに死にたいと思っていました。でも今日生きてたくても生きられない人の話を聞いて、もう二度と死にたいなんて思いません」「お母さんががんになって死にました。今日はお

母さんの想いが聞けたようでうれしかった」と、涙を流しながら話してくれる。これらの感想は、死と隣り合った患者たちが吐露した苦痛や苦悩、その末に得た生きる希望を、子どもたちが真剣に受け止めてくれた結果でもある。

先生方は、「今まで知らなかった子どもたちの想いをきくことができました」「あの子が手を挙げて発表するなんて初めてです。驚きました」など、思いがけない発見があるという。

今までに3万人以上の児童・生徒に命の大切さを伝えてきた。なかには家族をがんや病気・事故で亡くしていたり、治療中であつたり、子ども自身ががんを経験している場合もあり、細かい配慮が必要である。学校側と綿密に事前の打ち合せ、そして、授業後のフォローも行っていきます。

#### ▼授業を終えて

現在、がんは日本人の死因第1位（2016年）であり、「国民病」ともいわれる疾患であるにもかかわらず、健康な時に学ぼうという意識は低い。多くが他人事で、がんの患者が身近にいても、「自分には関係ない病気」だと思つて

いる。いざ自分が告知されてから慌てる例も少なくない。そのため自分に合った治療法や療養生活の選択がうまくいかないケースもある。「がん＝死亡」「がん療養＝制限の多い生活」などマイナスイメージが強い。そのため、そのような認識を変えていく活動（教育）も必要である。がんの正しい知識がないことは偏見や差別につながり、それが患者・家族の精神的・社会的苦痛を生む恐れもある。子どもの時から健康の大切さとがんの正しい知識を知ることが重要なのである。

現代の子どもたちにとって死は身近になく、死の捉え方も個人で大きく異なっている。いじめや自殺が低年齢化していることから、がんを学びながら「命」や「死」について考え、話す時間としても、この活動は必要だと感じている。そして、患者自身にとつても授業で体験を話すことで「自分が人のためになれる」という自己有用感や成功体験が得られ、それが生きる希望へとつながる。

人として生まれたからには必ず「死」が訪れる。しかし、その日を迎えるまでは「1日1日を精一杯、大切に生きる」という教育が継続的に必要であると考えている。